

## みおまおのジャム地ごく

中二・溝口 奏真

みおとまおは、パンケーキが大好きの、なかよし姉妹。休みの日には、ちよつと寝ぼうして朝の10時ごろ、おそい朝食を食べるのを楽しみにしています。お父さんが、ふわっふわのパンケーキを作ってくれて、それにジャムをたっぷりかけて食べるのが、大のお気に入り。

今日はいちごジャムをたっぷりかけて、パンケーキをちよつど食べ終わったところです。

「ジャムおいしいね。いちごのつぶをかんだら、少しぷちぷちとして、あまいけど少しすっぱくて、食欲をそそののよね」

グルメレポーターみたい。みおはそう思いながら、ジャムをもつと少しずつ食べればよかったな、残念そうにジャムのびんをのぞきました。ほとんど残っていません。

「そうだ、お父さんに作り方を聞いて、いちごジャムをわたしたちで作ってみたい？」

「うんうん。作りたーい」

まおもうれしそうです。

いちごをどっさりとおなべの中に入れて、砂とうも入れて、ぐつぐつにこみます。いちごがやわらかくなって、まっ赤になって、あたたかくなって、あまい、すっぱい、いいにおいもしてきました。おなべから、なんだかけむりのようなものが、ゆらゆらと見えます。

だんだんとはっきりしてきました。すると空中に、みおの顔くらいの高さの、赤色の小人がうかんでいます。

全身は赤く、かみの毛と服が緑色で、はだには黄色のつぶつぶがあります。ふわふわ空中にうかびながら、ぎよろりと大きな目で見おとまおを見て言いました。

「おれは、ジャムのようかいだ。こわいだろう。ジャムのおいがふんぷんしたので、出てきたぞ」

「空を飛べる小人だったら、ジャムのよう精じゃないの」

「よう精じゃなくって、ようかいだ。こわいだろう」

「あまり、ようかいつて気がしないね」

まおに腹を立てたようです。

「なんだと。お前たちを、地ごくに連れて行くぞ」

気がついたら、まわりは地ごくでした。目の前をまっ赤な川が、どろり、ぶくぶくと熱そうに流れています。あちこちに赤い池があります。熱さで空気がむわっとします。

「ひひひ、地ごくへようこそ。この川は、まっ赤な血の色で熱いぞ。こわいだろう」

ようかいは、みおとまおを地ごくに連れてきて、うれしそうです。

「お姉ちゃん、川に赤いものがたくさんういたりしずんだりしているよ。人の頭かな」

「なんだろうね。あれれ、それはいちごじゃない」

確かに、それはいちごでした。

「これ、もしかしたら、いちごジャムの川じゃないの」

みおは、においも、あまい、すっぱい、ジャムを作る時のおいを感じました。

「ジャムだ、ジャムだ。ジャムの川だ」

---

まおはいちごジャムの川を、喜んで見えています。

周りには、赤い池の他に、むらさき色、だいたい色、緑色のぶくぶく、どろりとした池。ういているのは、カシス、みかん、キウイでした。池の周りにその果物がなり、池に落ちてジャムに変わっています。これ、全部ジャムの池だ。本当にジャム地ごくだ。みおとまおは、わくわくしてきました。

「お前たち、血の川がこわくないのか。それなら鬼を連れてくるぞ」  
すると大人くらいの大きさの、赤い鬼とむらさき色の鬼が近づいてきます。

「人間の子どもだ。食べてやろう」  
どうしよう、鬼に食べられちゃう、みおとまおは心配しました。ですが赤い鬼をよく見ると、赤いはだには、いちごやクランベリー、ラズベリーの、赤い果物がなっています。むらさき色の鬼も、ブルーベリーやカシスの、むらさき色の果物がなっています。みおは思いつきました。

「鬼に食べられる前に、鬼を食べちゃおう」

「鬼を取りこむんだね」

みおとまおは、鬼の体から果物をもいで、食べてしまいました。

「この子どもたち、鬼を食べるぞ。なんておそろしい」

鬼はびっくりして、にげ出しました。ようかいはあわてました。

「鬼を食べるなんて、なんて子どもたちだ。こうなったら、えんま大王のところに連れて行ってやる。地ごくの王様だぞ。本当にこわいぞ」

目の前には、鬼よりもずっと大きなえんま大王がいます。手にぼうを持って、いすにすわって、みおとまおをぎろりと見えています。周りに家来もたくさん。えんま大王が言いました。

---

「子どもたち、地ごくに落ちたな。こわいだろう。ここにある、地ごくのかまの毒じるで勝負して、わしに勝てば地ごくから出してやる」

えんま大王とみおとまおの間には、大きなかまがあつて、中はまつ赤で、なにか液がぐつぐつにえています。それ、ジャムじゃないの。地ごくって、あまりこわくないし。みおは思いました。

「もう一つかまを用意するから、どっちがすごい毒じるを作るか、わしと勝負だ」

えんま大王は家来に果物を取って毒じるを作るよう命令しました。みおとまおも、まわりの果物を集めます。二人は前から、もしいろいなる果物を混ぜてジャムにしたら、どうなるんだろう、と気になっていました。いろいろな種類の果物の、ごちやまぜジャム作りに挑戦です。いちご、りんご、あんず、もも、パイナップル、レモン、マンゴー：みおとまおは、取った果物を全部えいと地ごくのかまに入れて、にこみます。あまいのとすっぱいのとごちやまぜのにおいと、絵の具をごちやまぜにしたような色のジャムになっています。

「そんなすごい毒じるは、初めて見るぞ。欲しいぞ」

えんま大王は、ごちやまぜジャムを見て、ひどくびっくりしています。

「お前たち、その毒じるをよこせ。そうしたら、地ごくから出て行っていいぞ。おい、そのようかい、家に帰してやれ」

「はい。お前たちは、地ごくをちつともこわがらないし、二度と連れてこないからな」

気がついたら、みおとまおは台所の作りかけのジャムの前にいます。



画：イシヤマアズサ

「あれれ、お姉ちゃん、わたしたち地ごくに行ってきたのかな」  
あそこは地ごくじゃなくて、天国だったよね。二人はわらいまし  
た。